けいおん！ ～軽音楽に出会う時～ （仮）

るてす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！　～軽音楽に出会う時～　（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９８７４Ｈ

【作者名】
るてす

【あらすじ】
引きこもりがちな女の子、藤本珠希は、桜が丘高校に入学して軽音部と出会う。

珠希！

放課後、桜が丘高校、音楽準備室。そこには、軽音楽部のメンバー五人の、のんびりした、いつもの風景があった。

ムギこと、琴吹紬が持ってきたケーキと紅茶を平沢唯、秋山澪、田井中律、中野梓の面々が皆、幸せそうに食べている。

とても普通の部活動の光景とは思えないが、練習はやるときはやっているらしい。

最初の一年は、四人で活動。梓は、新入生の時に軽音部に入った。、先輩方（澪も？）四人の、余りの超マイペースぶりにかなり戸惑っていたが、今ではすっかり軽音部の空気に馴染んでしまった。

「なぁ、私たち、三年になって、軽音部に居られるのもあと一年しかないんだよな」

高価そうな苺のショートケーキを口に運びながら律が話す。

「それはそうだけど……どうしたんだ律？　急に」

「私達が卒業したら、部員が梓だけになって、今度こそ廃部かなぁって」

「えぇ！？　ふぉんなのひゃやよぉ」

律の現実的な話に唯は口にケーキを詰めたまま声を上げた。

「前にも同じような事があったような……」

澪は溜め息をつきながら少し前の事を思い出す。

梓が入学する少し前　、活動実績がなかった軽音部に廃部の話が持ち上がった。新年度が始まって勧誘活動や新歓ライブを行ったが、結局、入部希望者は梓以外、一人も現れなかった。

次の部長は自動的に梓（一人）かもしれないが、他に部員が最低でも三人いなければ廃部である。

「今思えば、いままでコンクールとかに出たことなかったよな」

今まで学園祭などでライブをやったものの、それ以外は目立った活動実績を示していなかったことが皆の記憶に思い起こされる。

「新歓会や文化祭でライブをやった時とか、結構注目されてた気がしたのに、誰も来なかったわね」

「どうするんですか！？　……このままじゃ、来年には廃部ですよ」

梓が一年先の未来を予想して、うなだれる。

こうしている今も、軽音部は常に廃部ギリギリのラインで存続中なのである。

「だ、大丈夫だって！　明日の新歓会でライブやって、新入部員が入ればいいんだし！」

「そうだよ、あずにゃん！　きっと私みたいに、軽音部に興味もって入部してくれる人いるよ！　……たぶん」

「そんな根拠のないこと言われても、安心できません！」

律と唯の言葉に梓はプンスカと頬を膨らませて言い返す。

「と、とにかく、明日の新歓ライブに向けて練習するぞ。明日が本番なんだから！」

澪がベースを持ちながら、その場を制するように、全員に練習するよう切り出した。

「そうね。少しでもいい演奏ができるように、がんばりましょう」

ムギも賛同して、キーボードの前に立つ。

「よっしゃ、やるか！」

律もドラムの前へ。

（やっと練習できる……）

梓はギターを手に。

「うまうま～」

唯はと言うと、まだ食べかけのチーズケーキをまぐまぐと口に運んでいた。

「「早よせんかい！」」

律、澪の突っ込みが、音楽室に響いた。

世界が、暗かった。

本当に世界が暗いわけではない。

藤本珠希から見た世界が、暗かった。

世の中が暗いのではなく、自分自身が暗い……と言うのが本当の所。

「あぁ……今日も学校かぁ」

溜め息混じりに朝食のパンをかじる。

苺ジャムの甘ったるさが、口に広がる。

珠希は、先日から高校生である。

人と接するのが大の苦手な珠希は、小、中学校と、友人が少なく、学校以外では趣味の漫画を描いたり、大好きなアニメを見たり、ゲームばかりやって殆ど家に引きこもっていた。

進学に選んだ桜が丘高校は、女子校である。選んだ理由は、男子と接するのが苦手なこと、何よりも家から徒歩で通える距離だったためである。

「はぁ……春休み初日に戻りたぁい」

ボヤキつつ、新しい制服に着替え、長いストレートの髪を後ろに束ねてポニーテールにする。制服のリボンは、学年色で緑色になっ

ている。
そして身支度を整えて、自宅を後にした。
桜の鮮やかな花びらが舞う通学路を浮かない表情で歩く。珠希の周りには、上級生に混じって、これからの高校生活に期待に胸を膨らます同級生が多数通学路を歩いている。
「私も友達作らないと……駄目……かな？　でも、どうせ私なんて……」
楽しそうに会話をして、歩いて行く生徒を横目に見ながら呟く。
珠希は、高校生活が始まって、まだクラスメイトの誰とも親しくなれなかった。会話も殆どしていない。このままでは、今までと同じく、クラスで浮いた存在になる気がした。
「藤本さん！　おはよう」
ネガティブな思考を巡らせていると、後ろから声をかけられた。
「お、おはよう。えっと……誰だっけ？」
挨拶をしてきた人物は、同じクラスメイトだった。肩まで伸びた髪にウェーブをかけ、幼い顔立ちを残しながらも、整った顔立ちをした女生徒だ。だが、珠希は名前が思い出せない。
「ひど～い、同じクラスの豊崎だよ。豊崎奏」
奏は、珠希の反応に肩を落としながら、自分の名前を教えた。

「ご、ごめん、えっと……と、豊崎さん」

「カナでいいよ。藤本さん、一緒に学校行こうよ」

明るく微笑むと、珠希の横に並んで歩く。

豊崎奏は珠希とは正反対の性格をしている。

明るく、裏表のない、人当たりのいい性格で、入学早々、クラスの中で一番、存在感のある人物になっていた。

それでも珠希にとって豊崎奏は、名前を覚えていない程度の存在だった。それくらい珠希は周りに無感心だった。

「ねぇ、私も藤本さんのこと、下の名前で呼んでいい？」

「べ、別にいいけど」

「へへ、ありがと。珠希ちゃん、部活どこに入るか決めた？」

「まだだけど……　とよ……カナは決めたの？」

下の名前を呼ばれることに難痒さを感じながら話す。

「私もまだ。中学の時も、ずっと帰宅部だったから……どうしようかなぁなんて」

「そうなんだ。私も同じかな……？」

珠希は当然、部活動などと言うものは、やったことがなく、入ろうとも思わなかった。

「せっかくだし、何か部活に入ろうかな、て思ってるんだけど」

「私は多分、なにもやらないかも。入ったところで、どうせ私なんか……」

珠希は、遠目で「フフッ」と、薄ら笑み、溜め息をついた。

（うわっ……、暗いなぁ）

奏は、ネガティブな珠希の姿に、場の空気がズンと重くなったように感じた。

「そ、そうだ！　今日、新歓会で部活動の紹介とかあるから、一緒に見て回ろうよ」

「別にいいけど……」

二人は話しながら（ほぼ、話を振るのは奏）歩いていたらいつの間にか教室に着いていた。

「じゃあ、また後でね」

奏は自分の席に向かった。

（部活かぁ……。見るくらいなら、いいけど）

珠希は、自分の席に座る。そしてふと思った。

（私、普通に話せてるじゃん）

奏と普通に会話していたことに今さらながら気づく。あまり気兼ねしないで話せた相手は初めてだった。

「……変なの」

ボソッと呟くと、机に突っ伏した。目を閉じると睡魔が襲ってきて、珠希はいつの間にか、寝息をたてていた。

午後から始まった新歓会は、終わりに差し掛かっていた。

体育館で開かれている部活動紹介を見ていた珠希だったが、やはりどの部も感心を持てないでいた。

「どお、珠希ちゃん。やってみたい部、あった？」

「別に……」

隣に座る奏が尋ねるが、珠希は、つまらなさそうに目を細めて呟いた。

《次は、軽音楽部によるクラブ紹介と演奏です》

前の部活紹介が終わり、アナウンスが流れる。

「軽音楽部かぁ。私、去年の文化祭に来てたんだけど結構よかったよ」

「ふーん……何をやってるクラブなの？」

「バンド演奏だよ。あの時、ギターの人が遅れてステージに来たんだよ」

文化祭を見ていた奏は、軽音部が一番印象に残っているようだった。

「本番なのにギター忘れるって……」

珠希は、その話しを聞いてよほど緊張していたのか、それともただの抜けた人なのかと思った。

「あ、始まるみたい」

幕がゆっくり上がり、ステージには、５人の部員がそれぞれの担当楽器パートについていた。

「こんにちは！　放課後ティータイムです！」

ステージの幕が開き、去年と同じくＭＣを担当した唯が、部活内容の紹介や、自身の経験などを語った。

「……それじゃあ、聴いてください！　ふわふわ時間！」

全員が視線を交わし合うと、演奏が始まった。

「あ、そうそう、この曲で盛り上がったんだよ」

「……」

「珠希ちゃん……？」

奏は曲が流れる中、語りかけるが珠希はただ、じっとステージで演奏する軽音部を見つめていた。

（なんだろう？　この感じ……）

不思議な気分だった。
軽音部の演奏を聴いていると胸が高揚した。（珠希ちゃん、こんな顔もするんだ……）

見惚れている珠希を横目に見ながら、奏は微笑んだ。
入学初日から、ほとんど表情を変えず、浮かない顔しかしていなかった珠希の違う表情が覗けて、新鮮な気分だった。

「ありがとうございました！　新入生の皆さん、軽音部をよろしくお願いしまぁす！」

唯達の演奏が終わり、拍手と喝采が咲いた。
それと同時に珠希は席を立って、体育館を後にした。奏も後に続く。

外に出ると日が暮れて、空はオレンジ色に染まっていた。

「どうだった？　軽音部」

奏は珠希が一番惹かれていたと思われる軽音楽の印象について尋ねた。

「凄くいい演奏で……みんな、輝いて見えた」

「うん」

「私も、あの人達みたいに、輝けたらいいなって思ったよ……」

珠希は少し、愁いを帯びた表情で話した。

「そっか。珠希ちゃんにもみつかったのかな？」
「……？」
奏の何か悟ったような口振りに珠希は首を傾げた。
「と、そろそろ帰るね。夕御飯の支度しなきゃいけないんだ」
奏は腕時計を見て、そう告げた。
「……今日はありがとう」
「うん、また明日ね！」
奏は微笑んで手を振り、帰っていった。珠希も小さく手を振った。
「……そうだ」
奏が去った後、珠希はふと、思い出した。
（今日は、新刊が幾つか出る日だっけ）
珠希は寄り道をする事にした。
×　×　×
「はぁ～……なんで誰も来ないんだよ」
帰り道、律が溜め息をついた。

新歓会が終わった後、部室で入部希望者が来るかと期待しながらまっていたが結局、一人も来ること無く下校することになった。

「でもでも、明日とかにも来るかもよ？」

唯は今日のライブに満足げな感じで、落ち込んだ様子があまり見られない。

「観るのはいいけど、自分もやってみたい、て言う人は、少ないのかもしれないな」

澪のもっともな言葉に、全員言葉がない。

……唯は軽音部のメンバーと帰り道を別れた後、立ち止まってあることを思い出した。

「あ、そう言えば、憂にお使い頼まれてるんだった」

帰りが少し遅くなると話していた妹の憂に、今朝、夕飯の食材を買うよう頼まれていたのだった。

「忘れるところだったよ～」

唯は、来た道を戻って駅前に向かった。

「むふふ……新刊、ゲットー」

珠希が紙袋を胸に抱え、駅前にあるアニメショップから出てきた。

「最新巻出るまで、随分待ったよ。やっぱり私には、これが一番幸せなんだよね」

学校では、絶対に見せない満足げな笑顔をしている。

「そうだ、夕飯の買い物しなきゃ」

両親が共働きでいつも家にいないため、夕食はいつも珠希が作って独りで食べている。購入した漫画を早く見たいのも手伝って、軽い足取りでスーパーに足を運んだ。

「今日は、オムライスでも作ろっかな」

買い物カゴを片手に持ちながら、卵売り場に向う。

「……ひとつしか残ってない」

卵が陳列された棚には、十個入りの卵が一パック残っているだけだった。　これ幸いにと残りの一パックに手を伸ばした。

「あ……」

「おぉ？」

手に取ろうとした瞬間、珠希の手がもう一人の手と触れた。

（あれ？　この人、確か……）

珠希は、同じく卵を買おうとしていた人物を凝視した。ギターケースを右肩にかけて、同じ制服を着ている。

（軽音部の、ギターやってた人……）

唯だった。

（ひ……睨まれてる？　卵を取ろうとしたから？）

唯は、珠希に睨まれてると思い、体をガクガク震わせていた。

「あの……」

「は、はいぃ！？」

声をかけられ、怯えた様子で返事をした。

「譲ります。その卵」

「え？　あ、ありがとう」

唯は、卵を差し出され、キョトンとした目で受け取った。

買い物を終え、スーパーから珠希と唯が出てきた。

「ごめんね。卵譲ってもらっちゃって」

「別にかまいませんよ」

珠希はシレっと返した。卵を唯に譲った珠希は、他に作る料理が思い浮かばず、結局買ったのは、レトルトカレーひとつだけだった。

「ねぇねぇ、君、新入生だよね？」

「……藤本珠希っていいます」
「私は、三年の平沢唯だよ。よろしくね～」
控えめな感じの珠希とは反対に、唯は、にこやかに自己紹介した。
「先輩、今日の新歓会の演奏で、ギターやってましたよね」
珠希が唯のギターケースを見ながらきいた。
「そうだよ。見ててくれたんだぁ」
「えぇ……まぁ」
「どうだったかな？　私たちの演奏」
「……良かったですよ」
「えへへ、ありがとー」
本当は、もっと感じたものがあったはずだが、どう言葉にしていいかわからず、たった一言になってしまう。だが、そんな珠希の淡白な感想に、唯は照れていた。
「ところで、もう入るクラブって決めちゃったりしてるのかな？」
「いえ、まだ決まってないですけど」
珠希の返事をきいて、唯は恐る恐るきいて見ることにした。
「軽音部とか、どうかなぁ、楽しいよ～」

「……」

珠希は黙り込んだ。

「あれ……だめだった？」

「私、楽器なんて出来ませんよ……すいません、今日は、失礼します」

「あ……」

珠希は、浮かない表情で、逃げるように唯と別れた。

「珠希ちゃん……」

唯は、何故かそんな珠希の後ろ姿を見て、軽音部に入る前の自分と、重なっているように感じた。

珠希は、誰もいない自宅へと帰ってきた。

リビングに入るや、鞄を放り投げて、ソファーに横になる。

「……断っちゃったのかな？　あれ」

先ほどの唯との会話を思い出す。

『軽音部とか、どうかなぁ。楽しいよ～』

あの時、珠希は、誘われて一瞬、心が揺らいでいた。だが、楽器などやったことがない自分が入った所で、唯達と同じようには、やれ

ないと思った。

「まぁ、しょうがないよね」

自分に言い聞かせるように頷いて、起き上がる。

クゥ〜……。

空腹の虫が鳴った。

「とりあえず、ご飯食べよ」

買ったレトルトカレーを袋から出して、炊飯器を開ける。

「……」

……米が無かった。

……炊く分も。

「……ちくしょう」

どうしようもない憤りが、珠希を支配した。

× × ×

翌日、珠希は益々、ついてないと思った。

「はぁ……なんで独りで掃除してんの？　わたし……」

誰に言うでもなく、ホウキを見つめた。
今、珠希は独り、音楽室の掃除をしている。
本来は五人程で掃除をするのだが、生憎、珠希以外の掃除当番メンバー二人が欠席、残りの二人は、委員会に属しており、集まりがあるため来ていなかった。

「あ～あ……さっさと終わらせよ。帰ってゲームやりたいし」

テキパキと掃除を始める珠希。
無駄な動きがなく、かなり手慣れた様子でこなしていく。

「んく……届かないぃ！」

途中、窓拭きをしていたが、窓ガラスの上の方まで手が届かない。
椅子を台にするが、それでも、あまり身長が高くない珠希は、背伸びして届くくらいだった。

「ん？　カナ……？」

外を覗くと、下にいるカナが、窓越しの珠希を見上げてニヤニヤしていた。丁度、カナの位置からだと目の良い人には、珠希のスカートの中が覗ける角度になっている。

「うわぁ！？」

そのことに気づいた珠希は、慌てて椅子から降りた。恥ずかしさで顔が赤面する。

「も、もう、窓拭きはいいや……」

数分後、なんだかんだで音楽室の掃除を終わらせた。

「ふぅ、後は……準備室も掃除するのかな？」

めんどくさいと思いつつも、音楽準備室に入った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9874h/

けいおん！ ～軽音楽に出会う時～ （仮）

2010年10月13日15時32分発行